

# 少人数クラスによる大学生対象の文章表現教育法の実践報告

## A Report on the Practice of Pedagogy for Writing Expression in Small University Classes

野　　田　　春　　美　・　池　　谷　　知　　子	
Harumi Noda	Tomoko Ikeya
岡　　村　　裕　　美　・　建　　石　　始　　始	
Hiromi Okamura	Hajime Tateishi
辻　　野　　あ　ら　と　・　中　　尾　　桂　　子	
Arato Tsujino	Keiko Nakao
中　　崎　　崇　　・　仁　　田　　円	
Takashi Nakazaki	Madoka Nitta
森　　篤　　嗣　　・　湯　　浅　　章　　子	
Atsushi Mori	Akiko Yuasa

### 1. はじめに

大学における基礎リテラシー教育の重要性が指摘される中、神戸学院大学人文学部では、学生の文章表現能力を向上させるために、「文章表現の方法Ⅰ・Ⅱ」のクラス形態などを変更した。従来大人数でおこなわれていたのを、2003年度より少人数クラスに変更し、1年次生の履修必修科目としたのである。また、内容についても、新たな試みをおこなっている。

本稿は、「文章表現の方法Ⅰ」(2003年度前期)の実践報告であり、大学生を対象とした新しい文章表現教育法研究の中間報告である。執筆は、コーディネート担当の野田と、前期の授業を担当した全非常勤講師9名による。

以下、2で授業及び教育法研究の概要を、3で科目の目標を、4で授業開始直後の問題点を、5で前期の授業形態を述べる。そして、6で前期の成果・問題点と後期への展望について、テーマごとに詳しく述べる。最後に、7でまとめを述べる。

## 2. 授業及び教育法研究の概要

### 2.1 授業の概要

2003年度における、「文章表現の方法Ⅰ」実施の概要は以下のとおりである。

人文学部では1年次生の履修必修科目とし、18～20名の24クラスを設定した。受講クラスは、学籍番号によって振り分けた。授業は、非常勤講師8名が3コマずつ担当している。

法学部では選択科目であり、20名を上限とする11クラスを設定した。受講クラスは学生の希望に基づいて振り分けた。授業は、非常勤講師4名が2～3コマずつ担当している。担当教員の内、3名は、人文学部も担当している。

いずれも、テキストとシラバスは共通である。テキストは、『日本語を書くトレーニング』を使用した。このテキストの目標、特徴と思われる点を、「この本を読んでくださるかたへ」(p. 6) より引用する。

原稿用紙の使いかたとか、敬語とか、文の長さとか、そんなことばの表面的なことは、あまり出てきません。それより、こういう目的の文章を書くときには、どんな情報をどんな順序で書けばよいかというようなことを重視しています。

(中 略)

文章を書くときに大事なことは、どんな言語でも同じです。読む人のことをよく考えることです。この本によって身につけてほしいのは、文章の書きかたというより、結局は、読む人にたいする思いやりかもしれません。

上の引用部分からもわかるように、このテキストでは、文章を書くための表面的な技術の習得よりも、それ以前の、情報を伝える姿勢に重点がおかれている。大学生が文章表現能力を向上させるために、まず1年次生で必要なことはテクニックよりも姿勢であると考え、このテキストを採用した。

### 2.2 共通シラバスの内容

共通のシラバスでは、「主題と目標」を次のように設定した。

この授業は、文章によって人に何かを伝えるための、基本的な考え方や技術を身につけるための授業です。長い作文を書くのが嫌いな人でも、メールで自分の言いたいことを上手に伝えたい、という時があるでしょう。また、マニュアルや案内文を読んでいて、わかりにくいと思うこともあるのではないでしょうか。この授業では、メールやマニュアルなどの身近な文章を題材にして、わかりにくい文章はなぜわかりにくいのか、わかりやすい文章を書くにはどのようなことに気をつけたらいいのかを考えます。そして、実際に文章を書くトレーニングをつみ重ね、情報を過不足なく効果的に伝えるテクニックを身につけます。

また、共通シラバスでは、「授業計画」を、テキスト15課中1課から10課までの内容をもとにして、次のように設定した。

第1回 トレーニング1 お知らせのメール

第2回 トレーニング2 レストランのメニュー

- 第3回 トレーニング3 問い合わせのメール
- 第4回 トレーニング4 注意書きやサービス案内
- 第5回 トレーニング5 お願いのメール
- 第6回 トレーニング6 お店やイベントの広告
- 第7回 前半（1～5）の課題の講評
- 第8回 トレーニング7 わかりやすいマニュアル
- 第9回 トレーニング8 場所や交通の案内
- 第10回 トレーニング9 企画や提案を出す
- 第11回 トレーニング10 ニュースレターを作る
- 第12回 レポートや筆記試験の文章（基礎編）
- 第13回 後半（6～10）の課題の講評

### 2. 3 教育法研究の経過

「文章表現の方法Ⅰ」の実施、及び、教育法研究にあたっては、次のような経過を経ている。

まず、開講に先立って、2002年12月14日、科目担当教員と野田のメーリングリストを作成した。このメーリングリストでは、授業方法などについて、意見や情報の交換を自由におこなっている。些細な疑問や問題点も隨時相談しあうことのできる手段を確保することで、授業及び教育法研究の円滑な進行に、大いに役立っている。

次に、2003年2月9日、神戸学院大学において、事前ミーティングをおこなった。科目担当教員8名（当日までに採用が決定していた担当教員全員）と野田が出席し、午前から夕方まで、長時間にわたったミーティングであった。

ミーティングでは、まず、授業の方針、目標、方法などについての共通理解を確認し、詳細を決定した。評価は、出席点40%、課題30%、試験30%とすることで統一し、遅刻者の出席点の扱いなどについても細かく申し合わせをおこなった。

また、このミーティングにおいてたいへん有意義だったのは、担当教員全員で授業のシミュレーションをおこなったことである。教師役、学生役を交代しながら、実際におこなう予定のグループワーク中心の授業をシミュレーションした。そうすることによって、時間配分、学生の学習活動の実際などについて、起こりうる問題点が明らかになり、解決法を検討することができた。

2003年4月に授業が開始してからは、授業日には、担当教員間で自由かつ活発に意見・情報の交換をおこなっている。それに加え、メーリングリストを用いた意見・情報の交換が続いている。7月の前期試験にあたっては、試験問題は、担当教員が案を持ち寄ったものの中から選び、各時限で共通問題を作成した。評価法についても、意見を交換しながらおこなった。

そして、前期の「文章表現の方法Ⅰ」を終え、後期の「文章表現の方法Ⅱ」に入る前に、それまでの成果と問題点を議論するために、全員で合宿をおこなった。合宿における議論の内容は、6.に示す。

### 3. 科目の目標

「文章表現の方法」の科目の目標は、基本的に以下の3点に集約される。

- (1) 文章によって人に何かを伝えるための、基本的な考え方、技術を身につけさせる。
- (2) 「作文」ではなく、目的や読み手を設定した「文章」を書かせる。
- (3) 電子メールの文章スタイルに親しんだ学生が対象であることを意識した内容にする。

まず、(1) 及び (2) のもととなる考え方について述べる。文章を書くということはコミュニケーションを基礎とした表現活動であり、コミュニケーションの相手に理解してもらうための表現活動である。こういった考え方をふまえ、「文章表現の方法」は、大学での学修及び、卒業後の社会生活における言語表現能力の基礎を築くことを目指す。具体的には、(1) は特に心構えないしはスキルといった基本的な側面の目標であり、(2) は小中高での学校教育における「作文」とは異なることを意識化させ、コミュニケーションの基礎としての表現活動の一環であることを意識化させるための目標である。

次に (3) についてであるが、これは、(2) における「作文」との区別という目標をより明確にするために立てたものである。コミュニケーションを基礎とした文章表現活動は、教師にだけ読ませる「作文」とは異なり、理解活動を前提とした行為に焦点をおくものである。コミュニケーションを基礎とした文章表現活動は、教室にとどまるものではなく、より生活に根ざしたところに存在する表現活動であることを学び取ってもらうために、電子メールなど学生にとって日常的なメディアを題材として取り扱うこととした。

科目名としては「文章表現の方法Ⅰ」（前期）と「文章表現の方法Ⅱ」（後期）に分割されるが、上記の目標の下に前期と後期の学習目標をさらに細かく設定した。前期では導入として「情報を過不足なく効果的に伝えようとする姿勢、そのためのテクニックを身につける」ことを目標とし、後期ではその発展として「前期の学習内容を定着させながら、文章表現の技術を高める。特に、アカデミック・ライティングの基礎を身につけることに重点をおく」ことを目標とした。

上記の目標の(2)にあたる「作文」ではない文章表現教育を目指すという点は、大学生を対象とした文章表現教育、特に少人数クラスにより実現可能となる新たな視点である。大学教育では、高校までの作文教育と異なり、「受験」という枠を取り払うことができ、また、次なるステップである「就職」に向け、より実践的なコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の向上を目指すことが可能である。しかし、従来の大学教育では、こうした教育事情の差異を考慮せず、大人数講義による受動型教育になる傾向があった。

昨今では、小中高においても、メディア・リテラシー教育との関連や、「伝え合う力」を目標とした実践的側面への志向、さらには「総合的な学習の時間」との連携による科目横断型教育の基礎としての文章表現力の育成など、従来型の「作文」の枠を越えた取り組みがなされつつある。これからの中等教育は、これらの小中高における文章表現教育の成果を継承し、さらに学問領域での表現能力の向上や、高度職業人養成のための実践的な表現能力の向上に寄与しなければならない。したがって、本節で提示した「文章表現の方法」における科目の目標は、学問領域の枠を越えた新たな

な大学教育における表現能力の向上に適切なものである。

#### 4. 授業開始直後の問題点

「文章表現の方法 I」の授業開始直後、実際に発生した問題点を挙げる。

まず、必修科目になったことなどが書店に全く伝わっていなかったため、テキストの極端な不足が問題となった。何週間もテキストを手に入れることのできない学生もあり、その間の授業及び課題についての取り組みに支障をきたした。

また、自分の登録クラスを把握できず、他のクラスに出席する学生が頻出し、混乱をきたした。教員間で出席確認をおこなったが、数が多く、手間取った。

さらに、人文学部では学籍番号でクラス分けされていたため、同じ姓の受講生が多く、指名を頻繁におこなう授業としては不都合があった。例えば、同一クラスに 6 名の加藤という姓の学生がいたというケースもあった。

以上、テキストの不足、学生の登録クラスの把握、同姓の受講生の集中、という 3 点を授業開始直後の問題点として挙げた。

#### 5. 前期の授業形態

ここで、前期の授業形態を確認する。

この科目で使用したテキストは、さまざまなジャンルの文章を題材として、問題のある文章を提示し、その問題点を考えさせるという形式のものである。学生は、授業において、テキストで提示された文章のどこがなぜ悪いのかを考え、よりよい文章に修正するという作業を中心におこなった。

具体的な授業の構成を右図に示す。

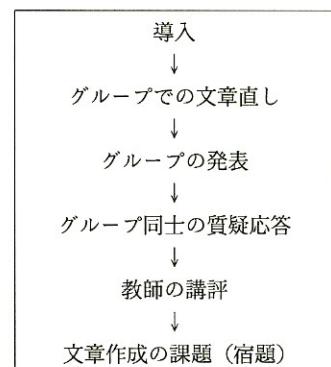
まず、各授業で取り上げるジャンルの文章のあり方などを教師が簡単に説明し、導入をおこなった。

その後、学生を数名ずつのグループに分け、各グループに課題の文章を指定した。学生はグループ内で、その文章の問題点を見つけ、それを修正していくという、グループでの文章直しをおこなった。

こうして、グループごとに修正案を考えさせるとともに、できあがった修正案を板書する人、板書された修正案について、どのような問題点を修正したのかを発表する人を決めさせた。指定の時間までに各グループの代表が修正案を板書し、その後、各グループから発表者が出て工夫点を口頭発表した。

グループの発表後、発表及び修正案の内容について、グループ同士で質疑応答をおこない、どういった問題があるか、どう修正すればいいのかについて、クラス全体で考えをまとめていった。

図 授業の流れ



最後に教師が講評をおこない、学生同士では拾いきれなかった要素を明らかにした。そして、各回、授業内容をふまえた文章作成の宿題を出し、次回の授業時に提出させた。提出された課題には、すべてコメントを書いて返却した。

以上のような形態で前期の授業はおこなわれた。

## 6. 前期の成果・問題点と後期の展望

2. で述べたとおり、前期の授業の成果と問題点についての意見を交換するために、全員で合宿をおこなった。2003年9月21日・22日、場所は赤穂簡易保険保養センターである。

合宿では、以下の6項目について、科目担当教員全員が発表資料を準備して発表し、それに基づいて議論をおこなった。

- (1) 少人数クラスの意義と課題
- (2) 『日本語を書くトレーニング』をテキストとした感想
- (3) グループワークの意義と課題
- (4) 講義に対する各自の工夫点
- (5) 評価法についての意見
- (6) アカデミック・ライティング能力の育成についての意見と後期の展望

以下、この項目順に、合宿における議論の内容を報告する。

なお、一部の教員は、受講生を対象に1～2回のアンケート調査（自由記述方式）を実施しているので、以下、必要に応じてその結果にもふれる。アンケートの質問項目は、授業の感想、要望、授業を受けたことによる自分の変化の内省などであり、教員によって異なる。

### 6.1 少人数クラスの意義と課題

少人数クラスの意義は、大きく分けて3点にまとめられる。

まず、この授業に取り組んだ教員の一致した意見として、少人数ならではの丁寧な指導が可能であるという点が挙げられる。提出課題に対する個別の添削・コメントなどはもちろん、授業時間中の机間巡回でも学生一人ひとりに教師の目が行き届く。各学生の授業での態度や個性を的確に把握することができ、その結果、より適切な評価も可能になる。

次に、学生の積極的な姿勢が引き出せるという点である。少人数であるため、学生同士が打ち解けやすく、グループに分かれた際にも議論が活発なものとなる。他のグループにも友人がいることで、無関心にならずにすむ。また、教師の目がすべての学生に行き届くことも、学生が授業に参加する動機となっている。

そして、すべての学生に発表の機会を与えることが可能であるため、自分の意見を自分の言葉で述べるだけでなく、他の人の意見を聞く姿勢も身につくという利点も挙げられる。授業に関するアンケート調査では、学生から、「意見を出しやすい」「一方的でなく、双方向的な授業だった」との感想が多く聞かれた。

このような意義の反映として、前期までの成果について述べると、テキストの内容については高いパフォーマンスを発揮できるようになっており、その意味では授業の成果は着実に上がっている。しかし、自分の文章を書くとなると、とたんにできなくなってしまう学生も少なくない。つまり、テキストでの学びを自分の文章へ下ろしてくることができていないのである。これをできるように働きかけていくのが教師の役割であると言える。

続いて課題を挙げる。最大の問題点は、意義の裏返しとも言えることであるが、学生同士が親密であればあるほど、馴れ合いの空気が生じてしまうということである。親しい人間と席を並べていると気が緩みやすく、授業に対する集中力を欠くという結果を招いてしまう。1コマの授業、あるいは半期を通じての授業の連続の中に、いかにメリハリをつけ、活発な雰囲気を残したまま緊張感のある授業を実践していくかが課題である。

少人数クラスの「少人数」が、20名であるということに関して、各教員からさまざまな意見が出された。4～5名のグループが4つできる現在の人数は、グループでの作業を中心とした授業には最適である。しかし一方で、学生が個人的に取り組むものである提出課題に対する丁寧な添削を少人数クラスの最大のメリットであるとすると、1クラスは20名であっても、教員1名で3クラス（約60名）、多ければ6クラス（100名以上）を担当している現状では、きめ細かな添削をしようとすると負担が大きくなり、その点で「丁寧さ」に疑問が生じてくる。

また、少人数制のメリットとして個々の学生と教師間の親しい人間関係が挙げられるが、その人間関係、教師に対する個人的な感情などが学生のモチベーションにつながるのは利点か問題点かというのも判断が難しいところである。同様に、「楽しいからがんばる」という姿勢は実力の育成に結びついているのか、という疑問もある。

200人規模のクラスを20人単位にするということは、単純に考えてコストが10倍かかることになる。つまり、10倍の成果が挙げられなければならない。「10倍の成果」とは何をもって計るのか、という疑問は残るにせよ、教員はそのような強い意識を忘れずに指導に取り組まなければならないだろう。一方で、そのような高い目的をもって設定された「授業」としてのスタイルと、学生の意識のあり方、つまり、授業は「受ける」ものであるという受動的・消極的な姿勢とに齟齬がある。それをいかに乗り越えていくか、模索を続けていかなければならない。

## 6. 2 『日本語を書くトレーニング』をテキストとした感想

『日本語を書くトレーニング』をテキストとした感想について、長所と課題の両面から整理をおこなう。

まず、長所から確認する。文章表現に関するこれまでのテキストは、どちらかと言えば、文章の構成、体裁といった形式を重視したもののが多かったが、このテキストでは形式よりもむしろ内容に重点がおかされている。そして、文章のジャンルとしては、メールや広告、レストランのメニューといった身近な題材が数多く取り上げられている。そのため、学生は興味をもって楽しく学ぶことができ、学習の成果が日常生活の中でも定着しやすいという効果が得られた。

また、このテキストは具体的な場面を設定しているため、場面に応じた実践的な文章表現能力を

身につけることができる。したがって、学内の教室活動における文章表現能力にとどまらず、学外での活動や社会に出た後に必要となる文章表現能力の育成にもつながる。このことも、これまでの文章表現のテキストとは大きく異なる点である。

さらに、このテキストを使用することによって、文章を書くための基本姿勢を身につけさせることも可能になる。文章を書くための基本姿勢は、テキストの巻頭部分に述べられている。「この本によって身につけてほしいのは、文章の書きかたというより、結局は、読む人にたいする思いやりかもしれません」というものである。つまり、よい文章を書くためには技術も大切かもしれないが、それ以上に読み手のことを意識して、配慮することが必要なのである。この基本姿勢を身につけさせることによって、文章表現能力に限らず、情報伝達能力全般の向上が期待できる。

次に、課題を取り上げる。最も大きな問題点として、マンネリ化を引き起こす可能性があることが挙げられる。このテキストは基本的に、同じ形式のレッスンが繰り返されるため、学生に同じことの繰り返しという印象を与えかねない。また、授業を重ねるごとに実際に能力が向上しているかどうかを学生に認識させることも難しい。今後は学生に同じことの繰り返しと感じさせないための工夫、ならびに、学生に能力が向上していることを認識させるための工夫が必要となる。

また、このテキストには「企画書」や「ニュースレター」など、実物に接していないとわかりにくいテーマもあった。この場合、授業で学んだことをすぐには活用できないという問題が生じる。実物に接していないとわかりにくいテーマの際に、具体的な目標をどのように設定するのかも課題となる。

さらに、内容と意識の両面で、アカデミック・ライティングに結びつけていくための方策が必要となる。このテキストの性格上、文章作成の際の形式に関わる問題はそれほど深くは取り上げられていない。しかし、アカデミック・ライティングの育成のためには形式面での技術の向上も必要となる。それをどのように学生に提供するのか、また、形式面での技術の重要性を学生にどのように認識させるかが課題となる。

以上、『日本語を書くトレーニング』をテキストとした感想について、長所と課題の両面から整理をおこなった。このテキストを使用して文章表現に対する学生の意識が大きく変化したこと、また、テキストに対する学生からの評価が非常に高いものであったことを最後に付け加えておく。

### 6.3 グループワークの意義と課題

授業では学生を数名ずつのグループに分け、できる限り多くの学生が実践的に活動するようにした（以下、数名のグループに分けて学習する形態をグループワークと称する。授業内のグループワーク活動の流れについては、「5. 前期の授業形態」の図を参照）。

少人数クラスでグループワークをおこなった結果、授業への参加が積極的になるという利点が観察された。

グループワークの最大の特徴は、学生にとって同じ視点の者同士であるという安心感である。ごく些細な疑問や修正箇所などからでも発言することができ、その積み重ねが積極性につながる。クラス全体に対して発表する以前に、グループ内で一度発表のリハーサルができる。そのため、学生

は、問題点の指摘や問題のある文章を修正する場合もものおじすることがなく、聴衆を意識しながらも、活発に意見を交換することができる。

また、身近な人の考え方について、他者を知ることから交流が深まる。そのため、学生同士の結束が強くなる。

以上のような安心感と結束強化により、授業参加が積極的になったのだと考えられる。

受講生を対象としたアンケート調査の結果でも、上記の利点を反映するように、グループワーク方式を続けたいという意見が多かった。

しかし、一方でグループワークであるために生じる問題もある。今回観察された問題としては、一部の学生だけが話を進め、グループ全体としての活動がうまく進まない場合があるということ、また、仲良くなった学生の間では私語が多くなりやすいことが挙げられる。

また、これらの問題に附隨することだと考えられるが、グループワークを苦痛と感じる学生や、自分の役割さえ終われば、他のグループに対するコメントなどには積極的でない学生の存在が指摘できる。

さらに、学生は、互いの問題点を指摘しあうことを避ける傾向があるという点も問題である。

以上の問題点から、グループという小単位であっても、他人の意見を取り上げながら自分の意見や主張を述べあう「議論」を苦手とする学生の存在が指摘できる。

「議論」では、他人の考えを尊重し、自分の考えを主張することができる能力が必要になる。しかし、それに慣れていないと、グループワークであっても、流れに参加することが難しくなる。

また、正当な批評は他人を全否定することではないということを理解していかなければならない。自分の意見が否定されることを、自分自身が否定されることだと捉えてしまうことになる。

したがって、議論を楽しむ余裕や、反対意見から得られるものがあることに気づき、議論が有益なものであることを十分理解することが重要になる。生産的な批判による議論がおこなえるようになれば、私語や疎外感といった問題も解消されると期待できる。

以上、グループワークにおける意義と課題について考察した。グループワークという方式は、学生が主体的に考え、授業参加が積極的になるということから、今後も続けるべきだと考えられる。しかし、グループワークにおける作業から得られるものをより深めていくためには、問題点を指摘しあうことが互いにとって有益であることに気づかせ、感情的ではない生産的な批判ができるよう、指導する必要がある。

#### 6.4 講義に対する各自の工夫点

講義に対する各自の工夫点について、「学生の意欲を保ち、主体的に考えさせるための取り組み」、「グループワークを進めやすくするための取り組み」、「評価に対する取り組み」の三つに大別して報告する。

まず、「学生の意欲を保ち、主体的に考えさせるための取り組み」について述べる。この種の取り組みで多かったものは、授業にゲーム性を取り入れるというものであった。具体的には、(1) グループ分けをカラーチップやトランプを用いたくじ引き方式にする、(2) 授業の最後に学生の

投票によって最優秀班を決める、などの取り組みがあった。これらは一定の効果をおさめたと思われる。しかし（2）は、学生による投票が「文章表現の良し悪し」ではなく「絵が上手」「色使いがきれいだ」などの観点からおこなわれることもあり、問題が残った。また、優劣がつくことを嫌う学生は、各グループの得票が平等になるように気を使う傾向があった。

その他の取り組みとしては、（3）誉める場合と厳しくする場合のメリハリをつける、（4）学生を否定しない、（5）答えを与えるのではなくヒントを与える、（6）各課の項目についてポイントを絞って提示する、（7）授業内容によっては、黒板ではなく模造紙を使って発表させる、などがあった。

次に「グループワークを進めやすくするための取り組み」について述べる。この種の取り組みには、（1）役割分担をさせる、（2）ワークシートを使用する、（3）グループワーク中になるべく机間巡視をする、などがあった。

（1）は、各学生が均等にグループワークに貢献できるようにするためのもので、「グループリーダー」「発表者」「他の班への質問担当」等の役割を分担させた。「リーダー」には、グループワーク中に沈黙が続くことを防ぎ、議論を進めることなどを求めた。「発表者」には、黒板の前に立って板書内容を発表してもらい、前半の授業で教師がしていたようなパフォーマンス（重要箇所に線を引く、他のグループから質問を募る、など）を求めた。これはプレゼンテーションの練習にもなったものと思われる。また、（2）の取り組みは、グループワークを効率よく進めるだけでなく、学生が板書した内容を形にして残しておくというメリットもあった。

次に「評価に対する取り組み」について述べる。この種の取り組みは、「学生の意欲を保ち、主体的に考えさせる」という目的につながるもの多かった。具体的には、（1）課題添削時に、問題のある箇所を赤ペンで、よくできている箇所を青ペンでチェックする、（2）課題を学生に相互評価させる、などがあった。

（1）は、回を重ねていくうちに、課題に赤色が減り青色が増えることによって、学生に自分自身のレベルアップを把握させやすいというメリットがあった。また、問題のある箇所に赤線を引くだけにしておいて、何が悪いのかを学生自身に考えされることも可能である。（2）は、講評の回に、学生同士で課題を交換して、相手の課題のいいところと悪いところの両方をコメントさせる、という取り組みであった。これを数回繰り返すと、学生が「互いに問題点を指摘しあう」ことを避けなくなる、という傾向が見られた。批判されることを嫌う学生が多い中、「互いに問題点を指摘しあうことによって、能力が伸びていく」という気づきは、大きな意義があったのではないかと思われる。

以上、三つに大別して工夫点を報告した。これらの取り組みの効果については推測の域を出ないが、一定の成果はあったものと思われる。しかし、すべての問題が解決されたわけではない。よりよい授業のためには、今後さらなる取り組みが必要となるだろう。

## 6. 5 評価法についての意見

ここでは、評価法について、提出課題、定期試験、成績評価の順に述べる。

まず提出課題についてである。提出課題とは、授業終了時に毎回学生に課す課題のことを指す。前期においてはテキストに挙げられている課題から1題を選択し、課題としていた。課題の評価は「真面目に取り組むか取り組まないか」を基準としておこなわれた。具体的には、内容が優秀な課題はもちろんのこと、ある程度課題に真面目に取り組んでいれば、多少内容的に未熟であっても高い評価を与え、あからさまにいい加減に取り組んだとわかるものにのみ低い評価を与えた。この評価法の問題点としては、優秀なものと及第点のものとの差別化を図ることができない点などが挙げられる。

次に定期試験についてである。定期試験は、実際に課題に取り組ませる技術系の問題と、文章表現に関する感想を書かせる感想系の問題の2問を出題した。まず感想系の問題についてであるが、これは明確な採点基準を設けることが困難であったため、何らかの感想が書いてあれば評価するということになってしまった。今後、評価のための試験としては、必要ないものと思われる。

技術系の問題については、書くべきポイントがおさえられているか否かを評価の基準とした。試験の性質上、ポイントさえおさえてあれば評価するため、実際には、学生の、文章に対する意識上での変化に対する評価となった。

その他、試験結果から指摘できることとしては、学生の意識面、知識面における向上は見られたが、感想の文章などには文法的、文体的、修辞上における問題点も多く見られたことなどがある。

最後に成績評価についてである。成績評価においては、出席点と課題点を重視した結果、次に示すように7割以上がAという結果となった。

人文学部	A 78.0%	B 13.9%	C 4.1%	D 0.2%	評価なし 3.7%
法学部	A 70.4%	B 15.3%	C 5.8%	D 1.6%	評価なし 6.9%

毎回の授業において、文章について考える姿勢や過程を重視してきた。したがって、平常点を重視する現状の評価法は、基本的には間違っていないと思われる。ただし、授業への貢献度の差が出席点に考慮されないといった問題がある。学生の実力を向上させるためには、平常点を低くし試験の比重を高くするなどしてもう少し評価を厳しくしていく必要があると思われる。また、平常点の評価に関しては、クラス間の公平性をどのようにして保てばよいかも、問題である。

## 6.6 アカデミック・ライティング能力の育成についての意見と後期の展望

最後に、アカデミック・ライティング能力の育成についての意見と後期の展望について述べる。

まずアカデミック・ライティング能力の育成についての意見であるが、やはり最大の問題は、いかに学生に興味をもたせ、真剣に取り組ませるかということである。前期に関しては、『日本語を書くトレーニング』を使用しグループワーク中心でおこなったため、学生は比較的興味をもって授業に参加していた。しかし教科書のないアカデミック・ライティング中心の授業では、どのようにして学生の興味を維持させ授業に取り組ませるのかを考えていく必要がある。

また一口にアカデミック・ライティング能力育成といっても、1年次生に対してどこまでを目標

にするのかを明確にする必要がある。例えば序論・本論・まとめといった最低限の形式をおさえることを目標とするのか、実質的な方法を身につけることまでを目標とするのかでは、大きく異なる。

その他には、学生の文章に対する慣れの問題がある。対象が1年次生ということもあり、ほとんどの学生がレポートや論文を読んだことがない。まずはそういう文章に慣れさせる必要もある。そのためには数多くそういう文章を読む機会をもたせることからはじめなければならない。

また文書を読むだけでなく、書く機会についてもアカデミック・ライティング能力の育成のためには増やしていかねばならないだろう。アンケート調査の結果では、学生が授業以外で自発的に文章を書く機会は、文章表現の授業の課題以外あまりないと答えた人が多かった。その課題についても毎回1題だけでは、書く量から考えると決して多くはない。授業においても授業以外においてどのように書く量を増やしていくのかも問題である。

アカデミック・ライティング能力の育成のためには、読みながら書き、書きながら読むといった往復練習が大量に必要である。それを考慮しながら、いかに授業を展開していくかが今後の課題である。

次に後期の展望である。特定のテキストを使用しない後期においては、授業の形態や取り組みについてさまざまな工夫が必要となる。ここでは後期の展望として考えられる工夫について取り上げたい。

前期の授業において採用したグループワークは学生に好評で、授業に対する興味をもたせるという点では有効な授業形態であった。アカデミック・ライティング能力を育成する授業にグループワークを取り入れるための案としては、特定の題目を設定しそれに関する資料収集や検討までをグループワークでおこなわせ、文章そのものについては学生個人で書かせるという方法が考えられる。その他、特定の題目を設定し、ディベート方式で賛成・反対の意見をグループごとに発表させ、賛成・反対の立場からの文章を個人で書かせるという方法も考えられる。

グループワーク以外の、前期との一貫性に関しては、小論文などを書かせる際、具体的な目的、例えば就職のための小論文といった課題を設定することによって、目的をもって文章を書く意識を維持させることなども挙げられる。

さらに、後期の課題として、前期の授業や後期で学ぶアカデミック・ライティングの授業で身につけたことを、文章表現の授業だけでなく、それ以外の授業におけるレポートなどに積極的に実践するという意識をもたせるよう導いていくことも重要である。

## 7. おわりに

以上、2003年度前期「文章表現の方法Ⅰ」における少人数クラスの実践について報告した。

少人数クラスできめ細かな指導をおこなったこと、グループワークを取り入れて授業に積極的に参加させたこと、身近な題材を用いて目的のある文章を書かせたこと、などにより、文章を書くための基本的な姿勢の育成については、ある程度の成果を上げていると言えるだろう。

今後は、前期に関する問題点を改善していくとともに、後期のアカデミック・ライティング能力

育成のよりよい方策を探求することが大きな課題である。前期の内容、方法とのつながりも意識しながら、教育法の研究を進めていきたい。

また、人文学部のカリキュラムにおいて、入門演習などの演習科目との内容重複を考慮する必要がある。「文章表現の方法」でどこまで教えるべきかについて、今後、さらに明確にしていきたい。

#### 参考文献一覧

- 木下是雄（1994）『レポートの組み立て方』筑摩書房  
小笠原喜康（2002）『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書  
野田尚史・森口稔（2003）『日本語を書くトレーニング』ひつじ書房  
浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版  
樋口裕一（2002）『やさしい文章術 レポート・論文の書き方』中公新書ラクレ 73

#### 付 記

本稿は、2003年度神戸学院大学人文学部研究推進費を受けた、「大学生対象の新しい文章表現教育に関する実証的研究」の成果の一部である。

（2003年11月25日原稿受付）

